めたのであつた。先生は当時、事に依つて祿を離れていたらしく、遠路十里を度々三重に杖を曳いて、三平の家を塾とし宿り師弟の情まことに濃であつた様である。

◇以上は三平の一人として長寿を保たれた小野良平翁の口述（約四十年前）である、これを前置きとして、竹内先生の書翰を見て貰いたいと思う。

略前先日ハ早速赤嶺氏より御越被下候趣、於途中玉田勝五郎子より承知致候、御懇篤不浅難有存奉候、

拙子も御地放逐後一度も不罷出、其以来得貴面不申候ニ付此節の久方振御迄得欵話可申登、山々相楽ミ罷出し処、即日放逐扨々残念唯此事ニ御座候、最早御地ニ足跡は生涯相成間敷、然る時ハ会期甚疎遠ニ相成申し、さりとは御懐サ無限ニ覚え候、拙も齢未四十ニ不満候得共、連年臥病羸弊五六十ノ衰翁ニ準じ最早長寿無覚束覚候、来陽共ハ此ニ御越被下間敷苛、兎角対面ならでは情誼難尽御座候、松井何某ならば無理共不思候得共、藤田某は絶而不存知人にて、我々師弟の欵情を割くとは、余りにも刻刻、しきりに長嘆息ノ次第ニ御座候、右斗乍末筆御大人始皆々様ニ宜敷御伝語奉願上候、

草々不尽

十月八日　竹内鍬吉

油屋真平様

和泉屋良平様

御旅宿にも参上寛ニ得御意申度候得共、四五日前より相憎病臥罷在候て、外出ハ勿論暫時も起生相成兼候、甚以乍残念此節ハ得拝話相成兼可申候、不本意此事ニ御座候、不悪御用捨下され度、扨又拙筆一葉御認見候処、甚不出来迫て書直し呈上可申候得共、先上置可申候、御笑誦下されたし、御帰宿の上は多田一統其外懇意ノ人々宜敷願上候、誠ニ先日は種々御両欵ニ預り千万辱奉存候、乍序御願申上候、先ハ臥病申不及外可々——、

閏四月十日　頓首

竹内節三

三重市

油屋真平様

（大野郡三重町公民館長）

歴史教育

大分県小学校

「社会科教育課程」を讀んで

冨来隆

この種のテキストは作成の労苦に比して批評というものはまあ何とか彼とか云えるものであると思うし、私にはカリキュラムなるものゝよくのみこめないことでもあるので、はなはだそぐわないと思いつゝ記させていたゞく。先ず単元一覧表を写しておく。

学年＼単元	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
一年	樂しい学校	よい子の遊び	運動会	のりもの	お正月	もうすぐ二年生
二年	お家の近所	じようぶなからだ	お店（おまわりさん）	おひやくしようさん	ゆうびん	
三年	わたくしたちの町や郡	わたくしたちの町や村の道路	郡の家畜	製材所	役場	
四年	町や郡の発達	水と生活	郷土の産物	昔の旅と今の旅	いろ〳〵の土地のくらし	
五年	米と麥	日本の産業	おりもの	日本の工業	商業の発達と日本の交通	
六年	新聞とラジオ	私たちの生活と政治	政治のうつりかわり	わが国の貿易	世界の国々	

「まえがき」によれば「単元の排列は、学習の時期と既習の事がらと関連させて展開できるようにした」ものであり、児童の心理的発達に応じ、社会的要求を考慮して作られたと云う。そして「文部省の実験学校において調査研究された「各学年における地理的・歴史的意識の発達」に基いたものである」とのことである。

これによつて考えると、私ごとき小学校教育に経験のない者にとつては全く批判の余地はない様に思える。しかし、児童心理の発達といゝ、地理的・歴史的意識の発達といゝ、これらは単に自然成長的なものではなくて、やはりこゝに示された様な単元において児童を啓蒙してゆくのであるから、それについて一・二の私見をのべる事は許され様かと思う。

第一に、単元設定の全体的連関と論理的展開のことである。カリキュラムにはこの様なことは実は不必要なのかも知れないが、私としては、少くとも教師の側には、教室における具体的事実の展示の背景には常に全体的な論理構造を理解しておるべきであり、それによつて児童の心理発達に応じて、系統的にかつ柔軟に指導して行けるものだと思う。そして一

般に新しい知識の拡大とそれの結びつきとは、常に「交通」によるものだから、少くとも交通の単元は、次年度への橋渡し（云いかえれば、より高い知識へのみちびき）として順序づけられるものではなかろうか。その為であろうか、或いは単なる偶然か、一年より六年に至るまで、交通の単元は終りの方におかれているのだが、三年の場合のみは、道路として第二単元に持つてこられている。私はやはりこれを最後にまわすと四年の第一単元にスムースにつながるのだがとひそかに思つている。

第二に、例えば六年の政治の問題では現在とうつりかわりとを分けているのに、貿易では一緒にした理由。単元が五でなければならぬのでもないのだろうから、無理にこういう形式にしないでもよいのではないか。とくに政治意識をねらつたわけでもあるまいのに、わざ〳〵不統一にするのはどうだろうか。

第三に、歴史と地理の科目的臭いが——中学校における分離の方向におされた故か——する。これは、教師の側における知識としては十二分に必要なことであること論をまたないが、児童にはやはり社会生活における全一性をもたらせるようにしてゆくべきではないのだろうか。ことに戦後、マルクス及びウエーバーことに前者の影響をつよく受け、それの摂取と反撥とが社会科教育にも波及しているが、社会の研究はすでにそれらの業績の摂取の上に立つて、さらに社会心理学および社会生態学という新しくしてかつ豊富な実りをもつ段階にまで達している。とくに社会生態学の発達には目ざましいものがあるのだから、それらをとり入れて、単元設計ならびに指導を試みるよう努力すべきではないかと思う。

要は教育課程の作成においても、また教室内にあつても教師たるものには、広くかつ深く歴史的・地理的な知識体系を持つことが望まれるけれども、何よりも必要なのはヴイヴイツドな典型概念の方法論的利用であり、児童には、新しい知識と、それにより社会生活を如何に考えるか・如何に物を見るかの力とを育成してやるように努力することが望ましいのだろうと思う。

終りに五年生の一・二単元と三・四単元が、一覧表と内容のところでは順序が逆になつている。これはまたどうした間違いなのか不審にたえない。

以上、勝手なことを述べた。素人の放談的意見でもあろうが御寛恕を乞いたい。もし有益な点が一つでもあれば幸いである。

× × × ×